

プラトンにおける時間と永遠

——『ティマイオス』37C-38C——

納富 信留

序

「時間」は私たちの生の基盤であり、哲学の主要な考察対象である。しかし、アウグスティヌスが告白するように、改めて問う時に、それが何か、分からなくなる。西洋哲学史で最初に「時間」を主題的に論じたのは前4世紀のプラトンであり、彼の時間論は、弟子アリストテレスの自然学や後代のプラトン主義者たちに受け継がれ、哲学的考察に基礎を据えた。

プラトンが「時間」を中心的に扱ったのは、『ティマイオス』(*Tim.*)の宇宙論に限られる。本論では、後世の時間論の出発点となるその議論を、テキストに即して検討する。

1. プラトン「時間」論の背景

万物の生成消滅に関心を向けた初期ギリシアの自然学では、「時間」(*χρόνος*)が説明に登場することはあったが——アナクシマンドロスの断片には「時の秩序に従って」(*κατὰ τὴν τοῦ χρόνου τάξιν*)とある(DK 12 B1)——考察の主題とはなっていない。

プラトンは中期対話篇の「イデア論」で、「常に、それ自体である」イデアを、「片時も同一でない」感覚物と対比して論じていた¹。そこでは永遠と時間が対比の軸となっているが、その「時間」が概念として解明されるのは、後期 *Tim.*の宇宙制作論であり、とりわけ37C-38Cが基本テキストとなる。プラトンはそこで先行する哲学者たちの議論を意識しながら、「永遠／時間」をイデア論の枠組みに位置づけている。議論の文脈で「時間」は「宇宙」(*κόσμος, οὐρανός*)の性質として導入され、あくまで宇宙のあり方の一部として論じられている点が重要である。

ティマイオスは宇宙制作を説明するにあたり、まず、「常にあるもの／生成し消滅するもの」の区別を導入して、議論の基盤とする(27D-28B)。宇宙は「常にあったもの」ではなく「生成したもの」(*γένεσεν*, 28b7)である。制作者(デーミウールゴス)は「常にあるもの、常に同一を保ち、永遠のもの」(*τὸ ὄν ἀεί, ἀεὶ κατὰ ταυτὰ, τὸ αἰδίων*)をモデルとして、宇宙を制作した(27D-29A)。モデルは「理性の対象となるすべての生き物」を包含する「完全な生き物」であり(31A-B)、そのモデルを単一性という観点で似せて作られたのが、単一体として生じ、あり続ける宇宙である。

「その単一性に即して、かの完全な生き物に似るようにし、……この宇宙はただ一つの種のも

のとして生まれ、現にあり、今後もあり続けるでしょう (γεγονώς ἔστιν καὶ ἔτ' ἔσται)。(31a8-b3)

制作された宇宙は、永遠のモデルに倣って時間における永続性をもつ。その「時間」を解明することが次の課題となる。通常は「一／多」に当たる「モデル／像」が、ここでは単一性という特性への注目によって「一／一」関係となっている。そうして作られた宇宙は、「本性上もつとも立派で最も善き作品」であり、魂を備え理性を備えた「一個の可視的な生き物」(30B-C)である²。

宇宙を制作したデーミウールゴスは「常にある神」であり³、作られた宇宙は、「いつかあることになる神」と呼ばれる(34A-B)。続いて、「不可分で常に同一を保つ有」(35A)などの「ある」を「同、異」の材料を混ぜ合わせる「宇宙の魂」の複雑な制作が説明されて、「時間」の叙述に移る。

2. デーミウールゴスによる「時間」の制作

では、37C-38Aのテキストを、節ごとに検討していこう⁴。

(I) 37c6-d1 ところで、このようにして生まれて来たもの(宇宙)が生きて動いていて、[1] 永遠なる神々の [2] 神像 (τῶν αἰδίων θεῶν γεγονός ἄγαλμα)⁵となっているのを認めたとき、そのの生みの父は喜びました。そして上機嫌で、[3] なおより一層モデルに似たものに (ἐπι μᾶλλον ὅμοιον πρὸς τὸ παράδειγμα) 仕上げようと考えたのです。

[1]「永遠なる神々」は何を指すか？ その解釈は難しく、テキストに疑いも投げかけられてきた。[a] 宇宙制作のモデルとなった「アイデア」か (Archer-Hind)、[b] 宇宙の「制作者」か、[c] 生み出された「天体」か (Cornford)、が候補に挙げられる。

まず、[a] 宇宙のモデルは「理性の対象となる生き物すべてを自己自身のうちに包括してもつ」単一のものであり (30C-D)、「永遠」(αἰδίων) と形容されていた (29A)⁶。他方で、解釈者たちが指摘するように、アイデアを神々として扱う箇所は *Tim.* にない。

他方で、[b] 制作者は単一であることから「神々」という複数形は相応しくない。

[c] こういった理由から Cornford は、天を運行する天体を「神々」と呼ぶと考え、モデルを指してその「神像」を意味するのではないとする。確かに、恒星はすこし後で「神的で永遠なる生き物」(ζῶα θεῖα ὄντα καὶ αἰδία, 40b5) と呼ばれており、大地や天体は後に「神々」と呼ばれている (40c3)。だが、この時点、つまり宇宙制作の第1段階では、まだ天体は制作されていない。作られる以前のものが言及されるのは不自然ではないか。あるいは、[c'] 宇宙の魂の「回転運動」をそう呼んでいるのかもしれない。ただ、その場合「永遠」が「全時間の限り」(36e4-5) という表現と対立するように見え、また「神々」という表現もやはり不自然に感じられる。

他方で、[a'] モデルとなる「理性の対象となるすべての生き物」(複数)を指すと考える可能性もある。すぐ後でモデル「生き物そのもの」も「永遠」と語られる (d1)。「神々」という表現が相応しいか、問題は残るが、私は目下この解釈が最適と考える。

[2] Cornford と種山は「神々」を天体ととるので、それらが住まう「神殿」と解する。だが、「神々」がモデルを指すとするとその目に見える姿としての「神像」が相応しい。

[3] すでに宇宙が生まれており、それが生きて動いている姿を見て、制作者が「なおより一層似たものに」仕上げると言われる。この過程は宇宙制作の第2段階をなす。Taylor ら比喩的解釈論者は、これを1つの制作過程の2側面とするが、ティマイオスは段階的に叙述している⁷。だが、「段階」は必ずしも時間的前後である必要はなく、理念的な順序でよい。第2段階は、「7つの天体」(太陽、月、5つの惑星)を「異」の回転運動に配置する作業に当たる(38C-39E)。それらの天体は、「時間の数を区分し、これを見張るものとして生じた」(38c6)とされる。

(II) 37d1-2 すると、モデルそのものは、まさに、[4] 永遠なる生き物 (ζῶον αἰδίων) としてあるので、そのようにまたこの万物をも、できるだけそれと同性質のものに仕上げようと努めました。

[4] 制作者は、モデルの「永遠」という性格に注目し、その点で類似を作り出そうとする。これは、モデルの「単一性」に即して類似させた過程(31b1)とパラレルである。つまり、単一性に即して作られた宇宙が一つの統合体であるのと同様に、永遠性に即して作られることで「時間」をもつという構造である。

(III) 37d3-4 ところで、この生き物は、その本性がまさに [5] 永遠的 (αἰώνιος) だったので、そのような性質は、実際、生成物に [6] 完全には付与することのできないもの でした。

[5] 「永遠」(αἰών) というギリシア語は、「常に」(ἀεί, αἰεὶ) の派生語であるが、ホメロス以来「生命、生涯」という意味で用いられていたが、やがて「長い時間」からアイスキュロスの頃には「ずっと」の意味で用いられる(Ag. 554)。「時間」と対比される「永遠」の意味は、プラトンのこの箇所が典拠となり、「永遠的」(αἰώνιος) という形容詞はプラトンが初出とされる(LSJ)。ここでは「常にあるもの」(27D-28B) というモデルの特性に注目して、その似像が制作されている。

では、「永遠」とは何か。無時間的な永遠(timelessly eternal)か、時間的な永続(everlasting)か? あるいは、プラトン自身が両者の間を揺れているのか(Owen)⁸? プラトンは他の対話篇でも、イデアについて「常に同一である」という表現をしばしば用いており、「常にある」という永遠性はモデルの特徴をなす⁹。この問題は、後述するパルメニデスやメリッソスへの対応に関わる。

[6] 永遠という特性は、像においてそのまま完全に似せることはできない。他方、宇宙は「生成したものの中でもっとも美しい」(29a5)とされ、「時間」ができるだけ似たあり方となる。

3. 「時間」の定義

アエティオスの学説誌においてプラトンの「時間」概念は、“αἰώνος εἰκόνα κινήτην”と説明され

る (DG 318.6-7)。「時間」の定義は、以下の通りである。

(IV) 37d5-7 そこで、永遠を写す、何か動く似像を (εἰκὼ κινητὸν τινα αἰῶνος)、神は作ろうと考えたのでした。そして、宇宙を秩序づけるとともに、[7] 一のうちに留まる永遠 (μένοντος αἰῶνος ἐν ἐνὶ) 写して、[8] 数に即して動きながら永遠らしさを保つ似像 (κατ' ἀριθμὸν ἰοῦσαν αἰώνιον εἰκόνα) ¹⁰ 作ったのです。そして、この似像こそ、まさにわれわれが [9] 「時間」と名づけてきたところのものなのです。

[7] 「一のうちに留まる永遠／数に即して動く似像」という対比は、「モデル／像」の特質である「一／多」をある仕方で含意する。「部分」や「相」という仕方で、時間は数 (多数性) を許容するからである。ここで「留まる」(μένειν) は、真の「ある」(イデア) に適用される特徴である (μόνιμον, 29b6) ¹¹。「似像」(εἰκόν) は、モデルの正確な比率を保つ像を意味する (29b2, cf. *Sph.* 235d-e)。

[8] 「数に即して」とは、それが理性によって計測されることを意味し、人間の魂による把握と、哲学探究の可能性をもたらす。47A では (昼夜・年月・四季の視覚によって) 「数が案じ出され、時間の観念と万有の本性についての探求が私たちに与えられた」と語られる¹²。

[9] 「時間」は何を意味するのか? [a] ニュートン的な「絶対時間」を指すのか (Taylor)、[b] 宇宙に与えられる秩序や数的形式を指すのか、あるいは、[c] 具体的な天体を指すのか? 天体の場合には、[c1] それで測る規準、いわば「時計」を指すのか (Guthrie, Mohr)、それとも、[c2] 測られる天体運行の数的秩序を指すのか¹³?

時間が惑星など天体の生成と組み合わせられることから、[a] 「絶対時間」ではないとして、「時間」が [b] それ自体で独立した存在 (数的秩序) なのか、[c] 天体それ自体かその属性かが、まず問題となる。「永遠」がモデルの有する特性であるとしたら、その似像の「時間」も宇宙のもつ特性と考えるのが相応しい。天体という形で秩序が具体化する以上 (38E, 39D)、[c] の選択肢が残る。

アリストテレスは「ある人々は時間を全宇宙の運動であるとし、別の人々は天球そのものであると主張している」(*Phys.* IV.10, 218a33-b1) と語り、前者でプラトン、後者でピュタゴラス派を指している (cf. DG. 318.11-12)。

4. 「時間」の部分と諸相

次に、時間の部分と相が規定される。

(V) 37e1-3 というのは、[10] 昼も夜も、月も年も、宇宙が生じるまでは存在しなかったのですが、神は [11] 宇宙が構成されると同時に、それらが生じるように仕組んだからです。

[10] *Rep.* VII. 530A-B では、天空の制作者が「日 (昼)、夜、月、年」を、比率を与えて秩序づけたことが語られている (cf. *Phlb.* 30C)。

[11] 時間が宇宙構成と「同時に」生じたとはどのような意味か？ 「時間の創造」というと、それ以前に何も無いいわば「無」からビックバンが起こって時間自体も始まったように考えるかもしれない (cf. 30A)。しかし、制作者が受け取った可視的な物は、「じっとしてはいないで、調子外れに無秩序に動いて」いた (30A)。ティマイオスは秩序化以前の「場」が「宇宙の生成以前にすでに存在していた」(52D) と語り、「不規則にあらゆる方向に動揺させられて、揺さぶられながら、また自分のほうも動かされ動くことによって」(52E)、動きや「痕跡」(53B) があつたと語る。宇宙の生成がこの原初的な場=素材の形づけ (秩序づけ) であつた以上、「時間」の生成もその意味で理解される。それ以前が「絶対的な無」であつたと考えるべきではない。

(VI) 37e3-5 そして、これらはすべて [12] 時間の部分 (μέρη χρόνου) なのですし、また、「あつた」や「あるだろう」も (τό τ' ἦν τό τ' ἔσται) 時間の相として生じたもの (χρόνου γεγονότα εἶδη) なのです。ところがわれわれは、気づかずに誤って、これらの言葉を永遠の有に (τὴν αἰδιον οὐσίαν) 適用しているのです。

[12] プラトンが「時間の部分/相」を規定するのは、プロタゴラスの議論を受けているかもしれない。彼は「最初に時間の部分を区別した (μέρη χρόνου διώρισε)」と報告されるからである (DL 9.52)。この報告には多様な解釈があるが、動詞の時制が区別されていた可能性もある。

(VII) 37e5-38a2 つまり私たちは、それがあつたとも、あるとも、あるだろうとも (ὡς ἦν ἔστιν τε καὶ ἔσται) 言っているのですが、真なる言い方では、[13] ただ「ある」 (τὸ ἔστιν) だけがそれに該当する のでして、「あつた」と「あるだろう」(τό τ' ἦν τό τ' ἔσται) とは、時間の中を進行する生成について (περὶ τὴν ἐν χρόνῳ γένεσιν ἰούσαν) 言われるのが相応しいのです。

[13] 「あつた」(未完了過去形) と「あるだろう」(未来形) は「時間の相」と呼ばれているが、「永遠のある」は両者には与らない。生成する事物についてだけ過去と未来が語られる。時制をめぐる問題では、パルメニデスら先行哲学者が意識されている。パルメニデスの詩で、女神はこう語っていた。

「それはかつてあつたのでも、いつかあるであろう、でもない (οὐδέ ποτ' ἦν οὐδ' ἔσται)。なぜなら「ある」は、いま、ここに一举に、全体が、一つの、融合凝結体としてある (νῦν ἔστιν ὁμοῦ πᾶν) わけだからである。」(DK 28 B8.5-6、井上忠訳)

パルメニデスは「ある」について、「あつた」と「あるだろう」を認めない (cf. B8.19-20)。その徴づけは、クセノファネスの詩句を意識し、それを修正したものとなっている。クセノファネスは「神」について、次のように表現していた。

「常に同じところに留まっていて、少しも動かない」(αἰεὶ δ' ἐν ταύτῳ μίμνει κινούμενος οὐδέν) (DK 21 B26.1)

パルメニデスはここでの「常に」の語をあえて落として、「ある」の特徴を語る。

「同一のもののうちに同一のものとして、それ自体で留まる」(ταυτόν τ' ἐν ταυτοῦ τε μένον καθ' ἑαυτό τε κείται) (DK 28 B8.29)

この修正は、「常に」という副詞が時間的持続を意味しており (cf. B15: αἰεί)、「ある」に適用できないと考えられたからである¹⁴。これに対してメリッソスは、パルメニデスに反対して、「ある」を「常に」という特徴において語っている。

「あったものは、常にあったし、常にあるだろう (αἰεὶ ἦν ὃ τι ἦν καὶ αἰεὶ ἔσται)。なぜならば、もしそれが生じたのであれば、それが生じたより前に何も無いことが必然である。ところで、何もなかったのであれば、ないものから何かが生じることもけっしてあり得ないだろう。」(DK 30 B1)

「そこで、それが生じたものでない以上、それはあり、常にあったし、常にあるだろう (ἔστι τε καὶ αἰεὶ ἦν καὶ αἰεὶ ἔσται)。そしてそれはどんな始まりももたず、どんな終わりも持たないで、むしろ無限である (ἄπειρόν ἐστιν)。……なぜなら、全体ではないものが常にあること (αἰεὶ εἶναι) は不可能だからである。」(B2)

メリッソスは「常に」を中心に据えることで、「あった」(未完了過去形)と「あるだろう」(未来形)も認めている。彼は更に、「あるもの」を「無限」と捉え (B3)、その時間性を「永遠」(αἰδιον)として論じていく (B4)。

一般にプラトンは、パルメニデスの絶対的「ある」の理解を引き継ぎ、「あった／あるだろう」を受け入れるメリッソスを退けた、と理解されている (Owen ら)。しかし、事態はそれほど単純ではない。*Sph.*での徹底したパルメニデス批判を考慮する時、彼の「ある」をそのまま受け入れているとは考えにくい。実際、パルメニデスが「ある」を特徴づける「今」(νῦν)という観点をプラトンは受け入れておらず、むしろメリッソスが強調した「常に」(αἰεὶ)を「イデア」の特徴としているからである。

プラトンはこのように、クセノファネス、パルメニデス、メリッソスと続く「ある」の時間的特徴づけを批判的に受容することで、新たな「永遠／時間」の対比を構築した。真に「ある」イデアの「永遠性」は、時制をもたず、時の区別をもたない意味で、無時間的な「常に」であるが、パルメニデスのような「今、一挙に」という特徴づけや、メリッソスによる「無限」という特徴づけも退けている。

他方で、永遠であるモデルの似像としての時間は、「あった／ある／あるだろう」という時制と時間の区別をもつ仕方、「常に」という永続性を有する。

(VIII) 38a2-8 というのは、後二者は動き (κινήσεις) に他ならないからです。しかし、不動の状態に常に同一を保っているもの場合は、時間の経過とともに年とって行くことも若くなり行くこともなければ、かつてなったことも、今なくなってしまっていることも、また、今後

あるだろうこともなく (οὐδὲ γενέσθαι ποτὲ οὐδὲ γεγονέναι νῦν οὐδ' εἰς αὐθις ἔσεσθαι)、総じて、生成ということが、感覚内で運動している事物に付与するどんなことも、そうした同一を保つものには該当しないのです、むしろ、それらのことは、永遠を模倣し (αἰῶνα μιμουμένου)、数に即して円運動をして行く (κατ' ἀριθμὸν κυκλουμένου) とおころの時間の様相 (χρόνου εἶδη) として生じたものなのです。

こうして宇宙と時間の一体性が強調される (38b6-c1)。時間が「永遠」なるモデル (πάντα αἰῶνά ἐστιν ὄν) に似せて生じた以上、「宇宙のほうは、これはこれで、全時間にわたって終始、あったもの、あるもの、あるだろうもの (διὰ τέλους τὸν ἅπαντα χρόνον γεγονός τε καὶ ὄν καὶ ἐσόμενος) だからです」とまとめられる (38b8-c2)。

結び

プラトンは「時間」を「永遠」の像とすることで、逆に私たちの世界の「時間」から「永遠」の性格を照らし出している。

まず、時間は生成した宇宙が有する特性であり、天体運動の数による計測がなされ、「あった／ある／あるだろう」という相で語られる。時間が制作される以前のカオスの状態は、「無時間的」であっても「永遠」ではない。

アイデアのもつ「永遠」性は、「時間」のモデルとしての超時間性にある。それは、先行する思想の批判的受容によって特徴づけられる。「永遠」に関して、「あった／あるだろう」を拒否して「ある」だけを認める態度はパルメニデスに近く、メリッソスと対立する。これにより「永遠」は、時間的永続性 (たとえば、宇宙のあり方) と区別される。他方で、「常に同一である」という強調は、パルメニデスが考えた「今、一挙に」といった点的・瞬間的な永遠性でもない。つまり、永遠とは、永続する時間ではないが、時間の点でもない、「常に、ある」なのである。

私たちはアイデア・モデルの特徴である「永遠」を、言葉で適切に表現できない。その理由は、私たちがあくまで「時間」の側、つまり似像の世界におり、そこから原物を「常にある、永遠である」という仕方ではしか記述できないことにある。プラトンは、そういった言語の不正確さを認識しながら、似像 (時間) から原物 (永遠) を語っていく営みとして、時間論を展開している。

他方で、プロティノスは「一」を「限度がない」とし、「永遠」を「無限」とするが (cf. III 7 [45], 5, 24, 25-26)、プラトンは「永遠」を「無限」とは語っていない点も重要である。

最後に、これら「時間の創造」の説明を、字義通りに理解すべきか (アリストテレス; Mohrら)、あくまで比喩的、または神話的に理解すべきか (スペウシッポス、クセノクラテス、クラントル、プロティノス; Taylor, Cornfordら) という問いが、古代以来長く論じられている¹⁵。しかし、本考察の範囲内では、プラトンが文字通りの「時間」創設を、アイデア論にもとづく宇宙論において想定したとすることに反対する、積極的な論拠は見出せない。

文献

- Archer-Hind, R. D., 1888. *The Timaeus of Plato*, edited with introd. and notes, Cambridge: University Press.
- Cornford, F. M., 1937. *Plato's Cosmology: the Timaeus of Plato*, translated with a running commentary, London: K. Paul, Trench, Trubner.
- Coxon, A. H., 1986. *The Fragments of Parmenides*, Assen: Van Gorcum.
- Guthrie, W. K. C. 1978. *A History of Greek Philosophy V, The Later Plato and the Academy*, Cambridge: University Press.
- Mohr, R. D., 1985. *The Platonic Cosmology*, Leiden: Brill.
- Owen, G. E. R., 1966. "Plato and Parmenides on the Timeless Present", *Monist* 50, 317-340; repr. his *Logic, Science, and Dialectic: Collected Papers in Greek Philosophy*, ed. M. Nussbaum, Ithaca, NY: Cornell University Press, 1986, 27-44.
- Taylor, A. E., 1928. *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford: Clarendon Press.
- 種山恭子, 1975. 『ティマイオス』(訳、解説)、プラトン全集 12、岩波書店

¹ 典型的には、*Phd.* 78C-E, 79D-80B, *Symp.* 211B を参照。

² Cf. 30C-D, 32D-33B, 33D.

³ 「理性の対象となり常にあるものの中で最も優れたものが生み出した」(37A)とも語られる(但し、読みに多くの解釈がある: 種山、45, n.3)。

⁴ 以下、*Tim.*の翻訳については、種山訳を基本にして、必要に応じて修正を加えている。

⁵ Cornford, 99 ff. "shrine": もし「神像」(=似像)とすると「永遠なる神々」が「イデア」(複数)を指すか、「制作者」(本来単数)を指すことになる。しかし、制作者はモデルではなく、イデアは『ティマイオス』で神々として扱われてはいない。「天体」を指すはず: "οὐράνιον θεῶν γένος" (天空の神々、39E), cf. *Rep.* 508, *Epin.* 983E. だが、目に見える崇拜対象という意味で「神像」でよいのではないか。

⁶ 「永遠のもの」(τὸ αἰδιον)は、29a3, a5, 37c6, d1, e5, 40b5 の6カ所で用いられる。

⁷ Taylor, 187-188 は、これは語り方の問題であって、8つの回転運動の制作と時間の制作は同一過程の2側面に過ぎない(つまり1段階)と説明している。

⁸ Mohr, 54, n.5 のリストを参照。

⁹ こういった表現の典拠については、Mohr, 53, n.2, 54, n.3 参照。

¹⁰ Cornford, 98 n.1 は、動く似像を「永遠的」(αἰδιον)と呼ぶことに疑問を呈して、「ἀέναον εἰκόνα」という読みの可能性を提案している (*Lg.* 966E, "ἀέναον οὐσία"と対応)。これに対しては、Owen, 39 を参照。

¹¹ パルメニデスも「ある」について「留まる」という語を用いており (B8.29, 30, 38)、その問題性は Owen からも指摘している。

¹² この点はおそらくピュタゴラス派に由来し、アリストテレス時間論に受け継がれる: 「前と後に即した運動の数が、時間である」(*Phys.* VI.11, 219b1-2)。

¹³ Mohr, 58.

¹⁴ Coxon, 207.

¹⁵ Guthrie, 302-305.